

Citation: Gillespie WJ, Gillespie LD, Parker MJ. Hip protectors for preventing hip fractures in older people. Cochrane Database of Systematic Reviews 2010, Issue 10. Art. No.: CD001255. DOI: 10.1002/14651858.CD001255.pub4.

CRG名: Cochrane Bone, Joint and Muscle Trauma Group

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 26 May 2010

Clib issue No.; N/U: 2010 issue 10, Update

背景: 高齢者における大腿骨近位部骨折は通常股関節部での転倒から生じる。股関節頸部骨折のリスクを減じる方法としてヒッププロテクタが提唱されている。

目的: 外部ヒッププロテクタは高齢者における転倒後の大腿骨近位部骨折の発生率を低下させるか否かを検討する。

検索戦略: Cochrane Bone, Joint and Muscle Trauma Group Specialised Register(2010年1月)、コクラン・ライブラリ2010年第2号、MEDLINE(1950年から2009年11月)、MEDLINE in-process(2009年12月30日)、EMBASE(1988年から2009年第52週)、CINAHL(1982年から2009年2月)、BioMed Central(2010年1月)、および、関連性のある論文の参考文献リストを検索した。

選択基準: ヒッププロテクタ使用と非保護コントロール群を比較している全てのランダム化または準ランダム化比較試験。

データ収集と分析: 2人のレビューアが独自にバイアスのリスクを評価し、データを抽出した。トライアリストから追加情報を求めた。データを固定効果モデルかランダム効果モデルを適宜用いて統合した。

主な結果: 看護ケアや施設介護の場で行われた13件の研究(11,573例の参加者)のデータを統合したところ、大腿骨近位部骨折のリスクが減少する有意傾向を認めた(リスク比(RR)0.81、95%信頼区間(CI)0.66~0.99):統計学的有意性は、バイアスのリスクが高いと評価された5件の研究(3757例の参加者)を除外すると失われた(RR 0.93、95%CI 0.74~1.18)。3件の試験(5,135例の地域在住の参加者)のデータを統合すると、大腿骨近位部骨折リスク減少のエビデンスは示されなかった(RR 1.14、95%CI 0.83~1.57)。骨盤骨折や他の骨折の罹患率や転倒率に対する統計学的に有意な効果があるというエビデンスはなかった。ヒッププロテクタの重要な有害作用は報告されなかったが、遵守は特に長期で不良であった。

レビューアの結論: 看護ケアにおいて虚弱な高齢者に利用可能になる場合、ヒッププロテクタは大腿骨近位部骨折の発生率を減少させる可能性があるが、高齢者における大腿骨近位部骨折の罹患率を減じるためのヒッププロテクタの装着の有効性はまだ明確に確立されていない。これらの知見が全てのタイプのヒッププロテクタにあてはまるかどうかは、現在までに同定された研究からは不明である。一部のクラスターランダム化試験には高いバイアスのリスクが見られた。ヒッププロテクタを提供される高齢者の受容と遵守が不足していることが、引き続き不確実であることの一因となっている重要な因子である。

(監訳 内藤徹)

翻訳公開日: 2011年7月12日

ご注意: この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年12回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。